加島屋本宅再現模型の制作―くらしの演出

図１　人形の大きさ

加島屋廣岡家本宅の模型では、中に人形を配置し、商いや暮らしの様子が再現された。模型の制作にあたり最初に決められたのは、時代と季節である。検討の結果、時代は近代における女性実業家の先駆けとして知られる廣岡浅子を登場させるために、浅子が廣岡家に嫁いだ翌年の慶応２年（1866）とした。また季節は米の収穫で米切手の発行や取引が増え、店先の賑わう旧暦10月とした。この設定はその後、前栽の紅葉、茶道具、台所の野菜など、模型の細部にまで反映された。

商売、風俗、しつらいについては、廣岡家の伝来資料に加え、文字記録、絵画など多様な資料を収集し考証した。

模型の縮尺は1/30なので人形の身長はせいぜい5㎝程度に過ぎない（図1）。しかし制作者は人形の表情や道具の細部に至るまで丁寧に仕上げ、生き生きとした情景を作り出している。

１．髪型と服飾

模型に登場する人形は全部で60体ある。人形は頭部から制作するので、まず髪型を検討し、ついで服装や持物について考証を進めた。風俗に関する基本資料は、幕末の三都（江戸・京都・大坂）の風俗や事象を比較した『守貞謾稿』である。武士、商人、御寮人、女子衆、子ども、職人など、髪型や服飾に関する記述を集め、同書の挿絵では不明な色彩や細部については、他の絵画資料で補った。

（1）武家

男性の髪型について『守貞謾稿』は、武家・商人・職人を並べて比較している（図2）。武士は「髪多く髷太く前後低く半ばを高くす」として、髷は太く中高に結うのが特徴だとしている。また商工業者は必ず小鬢（頭髪の左右側面の部分）を剃るが、武士は剃らない者もいる、とする。

着物については実物も伝わり、絵画資料も豊富である。小さな人形で表現できるものとして、『守貞謾稿』にある武士の帯の結び方などを再現した（図3・図4）。

刀の再現には正確な法量を確認した。大刀の総丈（約97㎝）、幅、柄の長さ、鍔の直径（約7㎝）、下緒の長さなどの情報を収集した。また大刀と脇差の差し方などについても脇差を体に近く、大刀は帯一枚分外に差す、などの情報を収集した。人形制作者からは実際の構造を知った上で作るのとそうでないのとでは差がある、という意見が寄せられ、

図２　男性の髪型『守貞謾稿』

図３　竪結び『守貞謾稿』

図４　帯を竪結びにする武士

なるべく具体的な数字や、構造に関する情報を提供するよう心掛けた。大刀の持ち方や下緒の処理などは、幕末の古写真[1]も参考になった。

(2) 商家

一方、商人の髷は「髪少なく髷前後中ともに直ぐ」(『守貞謾稿』) とあるように武士よりも髷が小さめで (図 2)、小鬢を必ず剃っていた。

奉公人の着物については丁稚、手代、番頭で差がある。例えば京都の三井両替店では、丁稚は「帯ハ小倉ノ無地デ、衣服は縦縞ノ木綿物」であった[2]。江戸の呉服商白木屋も、奉公して 8 年目までは木綿、9 年目で冬小袖や羽織が許され、12 年目で紋付や太織 (安価な絹)、18 年目でようやく上質な絹が許された[3]。加島屋が享和 3 年(1803) に定めた「定書」(「大同生命文書」) に「衣類着用之儀、御屋敷へ出勤之節可為紬。」すなわち大名の蔵屋敷に伺う時には紬 (絹)、としているのも、番頭クラスの者が出向いたということであろう。

加島屋の「定書」はさらに足袋は 4 月 1 日から 9 月 8 日まで履かぬこと、としているが、これは三井両替店にも同じ規定があり、商家の一般的な風習であったと思われる。「定書」はさらに提たばこ入[4]や銀細工などの格別華美な物、畳表付の下駄を禁じていた。

(3) 御寮人

御寮人は大坂の商家の主人の妻を意味する。模型では店の前を女中連れで歩く女性と、加島屋本家を訪れた廣岡浅子が御寮人である。女性の髷は種類が多く、『守貞謾稿』によれば少女時代は江戸・京坂ともに嶋田、結婚すると「江戸は丸髷を婦の正風とす」るのに対し、京坂は両輪髷か先笄であった (図 5)。さらに「前笄は専ら新婦これに結ふ。歯を染め眉を剃るといへども、大約三十未満の婦は、往々あるいは両輪あるひは前笄に結ふ」とする。すなわち先笄は若妻の髪型で、一般に結婚すると鉄漿を染め、子どもができると眉を剃るが、20 歳代のうちは往々にして先笄のままだ、としている。髷は年配になると小さく結った。

図 5　両輪髷 (左) と先笄髷 (右)『守貞謾稿』

図 7　角出しの図解

着物は裕福な商家の女性は「おひきずり」(裾を引く着方) であった。外出する時には衽のあたりを手で持ったり、腰の位置に紐で留めたりした (図 6)。色は「浪花自慢女風俗名物尽」、「滑稽浪花名所」、「浪花百景」、「浪華下村店繁栄之図」などを見ると紫、藤、紺など落ち着いた色あいのものが多い。模型では浅子は若妻であることや、特定しやすくするために、芝居絵の女房の衣裳を参考に萌黄色とした[5]。

帯は「角出し」という結び方で、御太鼓の両側から角がつき出したような締め方である。現在のように帯揚げをせず、帯締めもあまり使われなかったので、御太鼓が下に垂れ下がったようなゆるい締め方であった。浮世絵では構造が分かりにくいことから、実際に布を結んで写真に撮ったり、図解 (図 7) を作ったりして人形制作に反映してもらった (図 8)。

図 6　着物の裾をはしょる『浪花百景』

図 8　角出しの浅子

図 9　女中『守貞謾稿』

(4) 女中

『守貞謾稿』によれば、女中の髪は大坂では「丸輪曲」（丸髷）と決まっており「婢は必皆此形に結びて妻妾と制を別てり」とされた。「浪花自慢女風俗名物尽」にも「丸輪ハ下女が髪にて。余の髷（わげ）に結ことなし」とある。丸髷は江戸では既婚女性の一般的な髪型であったが、大坂では女中のみの髷であった（図 9）。

また同書は着物の衿について、「妻婢ともに褻には黒びろうど襟を専用す、久しく堪るが故也。蓋天保府命後暫く止之（レ）たり。今亦復故する欤」と記す。すなわち普段着には黒ビロードの「掛衿（かけえり）」をつけて着物を長持ちさせた、天保の倹約令で行われなくなったがまた復活している、とする。

女中の前垂れは多くの絵で「おはしょり」の下から描かれている。これは腰帯を略して前垂の紐でおはしょりをしていたからである。

(5) 職人・馬方・船頭・人足

図 10　江戸前期の植木屋
『人倫訓蒙図彙』

図 11　植木屋

『守貞謾稿』によれば「職人雇夫」の髷は「髪末を分つ」とあり、髷の先を刷毛のように散らしていた（図 2）。また小鬢は商人同様、剃っていた。

馬方・べか車をひく人足は「浪華下村店繁栄之図」、「滑稽浪花名所」、船頭は「浪速勝景帖」、「浪花百景」などを参照している。この模型は小さいため文様は再現していないが、縞や格子柄が一般的であった。

屋敷の庭で松の手入れをしている植木職人がいるが、大坂の植木職人の資料が江戸時代前期の古い絵しかなく（図 10）、他の職人図や江戸の植木職人を参考にして、半纏に股引の作業しやすい服装とした（図 11）。

荷物をもつ下男は『二千年袖鑒（にせんねんそでかがみ）』（図 12・18）を写したものである。挟箱（はさみばこ）の担い棒に下がる物が何か、不明であったが、「住吉図」屏風（個人蔵　図 13）に類似の物が見出され、風呂敷包と判明した（図 14）。

図 12　下男『二千年袖鑒』

図 13　下男　「住吉図」屏風

図 14　下男

(6) 子ども

店前の通りと裏の路地には幼い姉と弟の人形がある。弟はまだ 3 歳位の幼児で、この年齢の子どもは男女を問わず髪を剃っていた（図 15）。『守貞謾稿』には「京坂は稚男女ともに専ら奴と盆の窪のみ」、「又百会（ひゃくえ）に図の如く残すもあり芥子坊主と云。京坂にて略之（レ）てけしぼんと云」とある。すなわち盆の窪（後頭部中央のくぼんだ所）、百会（頭頂）以外は頭を剃っていた。5-6 歳になると髪を伸ばし始め、7-8 歳になると女子は銀杏髷とした（図 16）。模型では芥子坊主の男児と髪を結い上げた少女を再現している（図 17）。

図 15　幼児の髪型『守貞謾稿』

図 16　女児の髪型『守貞謾稿』

図 17　幼い姉弟

2．情景の再現

人形が配置された場所はそれぞれ加島屋を特色づける情景である。各情景の典拠や再現の工夫について紹介する。部屋の場所については谷論考の図 1（p.7）を参照していただきたい。

（1）土佐堀通り

店前の土佐堀通りを歩く人々は、『二千年袖鑒』「大坂 かじ久」弘化 4 年版（1847　図 18）の情景を再現したものである。左から加島屋の前を行く武家の一行と挨拶する町人男性、加島屋に入ろうとする町人男性、下男を連れた母子連れ、右に向かう町人女性と女中である（図 19）。また『二千年袖鑒』にない西半分には、べか車、荷駄、子ども、犬などを配した。さらに東端には駕籠から降りる廣岡浅子を配した。

べか車　大坂特有の小型の荷車をべか車といい「浪華下村店繁栄之図」（図 20）や「浪花百景」にも描かれている。『守貞謾稿』（図 21）は「輪は板をもってこれを製す。簀子もまた全くに板を張る。」、「輪、無名を用ひず、必ず町名屋号を記す」、「両替店に用ふる物。簀子短く、周りに縁あり、また後に棒を出し、これをもつて押し遣る。」と解説している。後ろから棒を押す者は楫（かじ）といい、進行方向を指示した。べか車の使用は役所へ届出が必要であった。模型は車輪の板に「大坂玉水町　加島屋」と墨書され「大坂改」の使用許可印が捺されている（図 22）。

上荷船（うわにぶね）　店の前には土佐堀川が流れている。川から見た加島屋付近の風景が『乗陸必携　大川便覧』に描かれていた（図 23）。大坂市中の堀川には、上荷船や茶船などの小型船が行き来していた。両者は大きさや構造が異なっていたが[6]、いずれも吃水が浅く、

図 18　加島屋『二千年袖鑒』

図 19　加島屋の前を再現

図 20　べか車「浪華下村店繁栄之図」

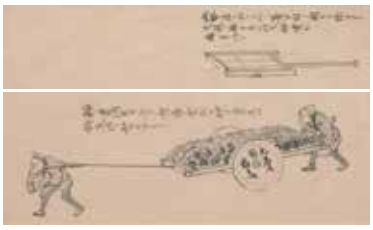

図 21　べか車（下）と両替屋用のべか車（上）『守貞謾稿後集』

図 22　べか車

図 23　加島屋付近の岸『乗陸必携　大川便覧』

図 24　上荷船「浪速勝景帖」

図 25　上荷船

図 26　法仙寺駕籠 『守貞謾稿後集』

図 27　駕籠から降りた浅子

港に接岸できない大型の廻船から船荷を下ろし、市中に運ぶ瀬取りを行っていた。模型は「浪速勝景帖」（大阪くらしの今昔館蔵）に詳細な図（図 24）があり、『大阪市史』第 5 巻に図面が掲載されている上荷船を再現した(図 25)。上荷船は長さ 30 尺 8 寸(9.33 m)、幅 6 尺、20 石積みで、加子 2 人で操った。模型では「久留米藩蔵屋敷図」（株式会社神宗蔵）にもある瓢箪型の俵を積み、その上に筵を掛けている。

駕籠　通りの東端には駕籠から降りた若い御寮人の一行がいる。これは「二千年袖鑑」には描かれていないもので、廣岡浅子が加島屋の本家に立ち寄った場面を表している。浅子は加島屋分家の当主廣岡新五郎に嫁いでおり、その屋敷地は江戸堀 1 丁目にあった。浅子は外出には必ず乗物を用いたとあり、そうした豪商の暮らしを再現している[7]。江戸時代に町人の使用できる駕籠は、京坂では法仙寺(宝泉寺)駕籠、あんぽつ駕籠、京四つ駕籠の 3 種類であった[8]。ここでは最上級の法仙寺駕籠（図 26)を再現している。乗用部は板張りの箱型で畳表を張り、屋根や窓枠などの木部は春慶塗または能代塗（黒)、側面には引戸があり小窓には竹簾がかけられていた。さらに乗り降りの際に頭があたらないよう屋根の一部が開閉でき、担い棒の長さは 3 mほどあった[9]。富商・医者・大名家来の小身が使用し、裃着用でもないと乗るのがむずかしいとされた(『守貞謾稿後集』)。豪商が実際に使用した駕籠は各地で公開されており、日下部民芸館（岐阜県高山市)、岡御殿（高知県田野町)、河合家住宅(奈良市今井町)などに伝来する駕籠を参照している(図 27)。

(2) 見世

見世の間は加島屋の商売の一つである「入替両替」の様子を表している。米仲買人に米切手を担保にお金を貸すものだが、絵画資料が残されていない。そのため、ここでは同じく米仲買人の往来があった「米方両替」（先物取引の清算を行う店）を描く『米穀売買出世車図式』（図 28）を参照した。土間に立ち、銭の入った巾着を首にかけた男達は

図 28　米方両替『米穀売買出世車図式』

図 29　見世の間

図 30　米仲買人
『滑稽浪花名所』

図 31　米切手

図 32　包銀と船箪笥

図 33
包銀用印の印影

図 34　廣岡家伝来の船箪笥

米仲買人で、髷には筆を立てている（図 29）。米仲買は「浪花百景」や「滑稽浪花名所」の堂島米市の場面（図 30）にも描かれ、股引を穿き同柄の足袋を履くのが特徴であった。米仲買から丁稚が受け取っているのは米切手である。これは廣岡家に伝来した米切手（図 31）を元に、視覚効果も考慮してやや大きめに再現している。結界の後ろにいる羽織を着た男は番頭で、帳簿を確認している。盆の上に積まれているのは包銀（銀を包み封印したもので高額の取引に使用）で、これも廣岡家に伝来した包銀用の印（図 33）をもとに再現した。模型では1辺 1cm の包銀の中に「銀五百目／加島屋久右衛門改」の文字を入れている（図 32）。手代の横の船箪笥も廣岡家に伝来した船箪笥（図 34）を再現している。部屋の奥の帳場箪笥と天秤は貨幣博物館などの資料を参照した。

（3）表座敷の襖絵と掛軸

表座敷では加島屋のもう一つの商売である「大名貸」を表している。加島屋は大名に対して融資だけでなく財政顧問的な役割を果たしていた[10]。裃をつけているのが 8 代目当主の久右衛門正饒で、蔵役人に今年の蔵米入札について報告している。前に置かれた「判書帳」や、「中津藩」と書かれた木箱は、廣岡家に伝来した物を再現している。（図 35）。

図 35　表座敷

襖絵　17 畳半の表座敷は、この屋敷では最も広く、幅 2 間半（4.77 m）という大きな床をもつことから最上位の接客空間であることが分かる。模型ではこの座敷にのみ絵襖を嵌めた。町家ではあるが武士を迎える部屋であり、襖絵は武家空間で発達した絵画の格式に従っている[11]。

大阪くらしの今昔館は襖絵を数種、所蔵している。その中から大坂の町家に伝来した大坂画壇の絵師による襖を選ん

図 36 「蘭亭曲水図」襖

図 37 「林和靖図」襖

だ。模型の開口部から最もよく見える南側の襖7面には、狩野派の絵師である江阿弥（大岡卜信 1700 ～ 1775）の「蘭亭曲水図」襖（図 36）を一部調整して嵌めた[12]。欄間は筬欄間である。ついで東側の 4 面の襖は中井藍江（1766 ～ 1830）の「林和靖図」襖（図 37）を嵌めた。藍江は四条派の絵師であるが、画題が江阿弥の襖と同じく中国人物図であること、大きさが図面に一致し調整を要しないことを重視した。

掛軸　加島屋廣岡家では昭和 3 年（1928）に書画骨董の一部を売却した。それに先立ち入札品の写真入り目録が作られ、入札の参加者に配られた。この売立目録には法量、伝来、付属品なども記載されており、廣岡家のしつらいの様子が明らかになる。模型に用いる掛軸についてはこの売立目録から選ぶことにした。

2 間半という床の幅は三幅対が余裕をもって掛けられる広さである。分家の五兵衛家の床も 2 間という大きさで、両家の蔵品が混在している売立目録には三幅対が 9 組も掲載されていた。床の広さを生かすためにも、これらの三幅対の中から選ぶことにしたが、モノクロ写真から色を再現するのが課題であった。検討のさ中、目録にある三幅対（図 38）の摸本が廣岡家で発見された（図 39・40）[13]。原本は徽宗皇帝筆「鶺鴒図」、李安忠筆「鶉図」、松花堂昭乗筆「竹雀図」を組み合わせたもので、目録の巻頭に掲載された名品であった。

この作品は最初から三幅対として制作されたものではなく、「鶺鴒図」はもとは単独の作品、「鶉図」はもとは別の鶉図と双幅の作品で、ともに足利将軍家の所蔵品（東山御物）であった。2幅を別々に入手した小堀遠州は、茶の門人である松花堂昭乗に「竹雀図」を描かせ、三幅対としたのである。広間の茶を復活させた遠州らしい作為といえよう。この三幅対は廣岡浅子の茶会で用いられ、その折に客であった馬越恭平（実業家）が昭和3年の売立で落札する。その後さらに所蔵者が変わり、現在は個人蔵で「鶉図」のみ重要文化財に指定されている。

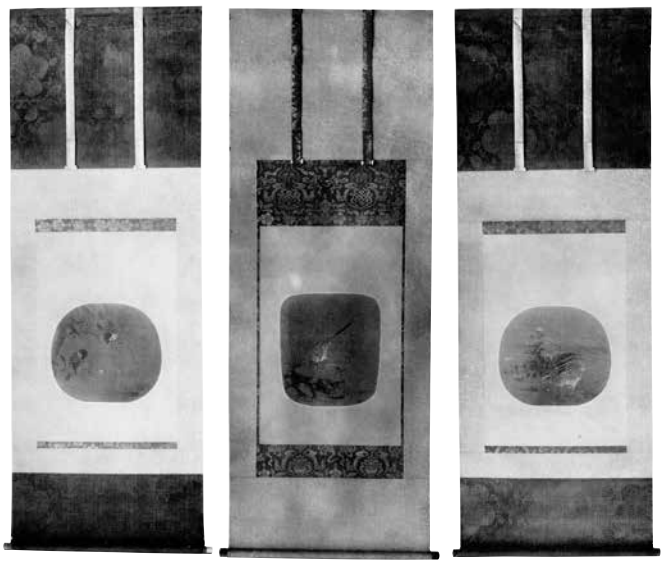

図 38　売立目録　左から「竹雀」「鶺鴒」「鶉」

以上のように、徽宗の三幅対は伝来に多くの物語があること、摸本が発見されカラーによる再現が容易であることなどから表座敷の床の掛軸として採用した。ただし団扇形に描かれた小ぶりな絵であるため、若干大きく再現している。

（4）茶室の道具

6 畳の茶室では、当主の正饒が蔵役人を正客として茶会を催している（図 41）。正饒は表千家から、家元後継者や高弟にのみに許される「的伝」（免状）を伝授された茶人であった。

前述のように模型の季節は 10 ～ 11 月である。炉開きの済んだ 11 月初旬に、賓客を招き、今は濃茶を呈しているという設定である。掛軸や道具は売立目録の中から設定にふさわしく、1/30 の大きさにしても形が判別できるものを選択している。

掛軸　掛軸は売立目録の中から清巌宗渭（大徳寺170世　江戸前期）の書「一の字」（図 42）を選んだ。これは『碧巌録』[15]第47則「雲門六不収」の頌の冒頭の語句「一二三四五六」を記したものである。大徳寺住持の書は茶道で尊重されること、出典が明らかなことから採用し

図 39 「鶺鴒図」模写

図 40 「鶉図」模写

図 41　茶室

図 42　売立目録「一ノ字」

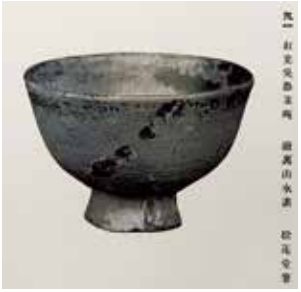

図 43　売立目録「紅葉呉器茶碗」

た。表具は茶室の聚楽壁に映える色として天地に銀鼠色、中廻しは濃い金茶色とした。

茶碗　茶碗は秋冬という季節にも合い、加島屋の名品として知られた「紅葉呉器茶碗（もみじごき）」（図 43）とした。呉器は朝鮮半島で作られた陶器で、紅葉呉器はその中でも独特の色を有するものである。かつて豪商の鴻池家・平瀬家・廣岡家はそれぞれ紅葉呉器茶碗を所蔵し、浪花の三名物と称された。廣岡家の茶碗はその中でも第一とされたという。ある時、三家の紅葉呉器茶碗を見比べようということになった。事前に調べた鴻池は、自家のものが廣岡家のものに劣ることを知り、碗を出さずに帰ったという逸話がある[16]。こうした掛軸の典拠や茶碗の逸話は茶室における物語を豊かにし、鑑賞者の印象を強くすると思われた。

その他の茶道具　その他の道具も売立目録から選び再現した。花入れは「了々斎　竹一重切花入　銘琴風」とした。小さな模型の中でも材質が分かりやすいこと、利休の創案という伝承があることによる[17]。茶入れは「高取茶入　権十郎侯箱」とした。売立目録の中に奈良の高取焼が多く、当主の嗜好を反映すると思われた。箱書をした権十郎は小堀遠州の息である。棗（なつめ）は「黒中棗　江岑判　卒啄斎箱」で、表千家 4 代の江岑宗左の判と 8 代件翁宗左の箱書をもつ黒漆の中棗とした。香合は「ノンカウ　葛屋香合　了入箱」すなわち楽家 3 代道入の葛屋香合とした。葛屋香合は田舎家の形を表したもので 9 代了入の箱書をともなう。その他、宣徳地紋建水、福庵釜、青交趾竹輪蓋置、棚などを売立目録から選び、現存する類似の茶器から色や形を再現した。

さらに売立目録にはない花瓶敷は表千家で好んで用いられる円形のもの、花は茶花として広く用いられる椿とした。これらの道具類を1/30の模型で完全に再現することは困難であったが、5mm ほどの高さの紅葉呉器に、有名な釉薬の指跡を再現するなど細かい細工が施された。

道具の配置　茶室は亭主の上座に床がある上座床で、亭主の右手に客が座し、茶室の外の左手に水屋（勝手）のある本勝手である。掛軸が横軸であるため、花入れは床置きとした。竹の花入れは真行草の草にあたるため、床の左側に寄せて置き、香合はその右に置いている。

道具が決まると人物の姿勢や所作を考証した。亭主の向き、茶碗や茶杓の位置、表千家流に特有の出帛紗（だしふくさ）の厚みや畳み方、客人の扇子の位置など、茶人が見ても違和感のないよう注意した[18]。

（5）奥座敷の団欒

8 畳の奥座敷は内向きの接客空間である（図 44）。右奥に 8 代正饒、手前が正饒の 3 男で 9 代となる正秋、左手前が正饒の次男で分家の養子となった信五郎、奥が信五郎の妻の浅子である。

大黒図　正饒の背後の床の掛軸は廣岡家伝来の「大黒図」（個人蔵　図 45）を再現した。元の図には「梅窓庵」の印があることから、6 代当主正誠（まさよし）（1774 ～ 1833）の作と考えられる[19]。じつは正誠によるほぼ同一の構図の「大黒図」がもう 1 点あり、箱の口貼りに「大黒画　甲子ノ日に書之　正誠筆」とある。甲子の日は子（鼠）を使う大黒天が祀

られ、甲子待が行われた。大丸や大坂･京都の三井両替店でも「大黒講」が行われており、大黒天が商売繁盛の神として広く信仰されたことが分かる[20]。「大黒図」の表具は現状を踏襲し、天地は浅葱(あさぎ)色、中廻は古代紫とし、洒脱で軽快な雰囲気に合わせて一文字と風帯は省略した。

漢籍　浅子は子どものころ本を読むのを禁じられるが、結婚後は夫の新五郎とともに漢学塾に通うほど勉強に興味を持っていた。ここでは 2 人が漢学塾の帰りに本家に立ち寄ったという設定である[21]。浅子は風呂敷包から漢籍を取り出して熱弁をふるい、正秋と信五郎が茶を飲みながらそれを見守っている。浅子は後に日本女子大学校（現在の日本女子大学）の創立に関わるなど、女子の教育に熱心だった。浅子の思想や性格を示す逸話として再現した。

カステラ　4 人の手元にある茶菓子はカステラである。カステラの製法を記した『万宝料理秘密箱』（卵百珍）は、天明 5 年（1785）以後たびたび再刊され、カステラが茶会で用いられることもあった。加島屋のすぐ近くには大坂で最古の菓子店である「高岡福信」（寛永元年創業）が店を構えており、浅子も食した可能性が高い。

図 44　奥座敷

図 45 「大黒図」

（6）台所

加島屋には家族の他に使用人が 20 ～ 25 人いた。その食事を賄う台所は 3 × 10 間の大きな空間である。模型は東側の壁の南半分を取り払い、内部を見せている（図 46）。

「加島屋本宅絵図」には竈、井戸、走り（流し）、棚、水壺などの位置が記載されているが、実際の台所にはさらに細かい様々な道具があった。それらの道具のリストアップや配置の参考にしたのは以下の資料である。

① 現存する町家の台所

大阪市内に残る数少ない江戸時代の町家建築である「適塾」（重要文化財　江戸後期）など、現存する江戸時代の町家を参照した。また京都の町家には江戸時代とほぼ同じ平面の台所を現在も使用している例がある。ガスレンジや水道が導入された後も竈や井戸が残され、その使用した痕跡や台所道具の配置が分かるのは貴重であった。

② 雛道具

かつて大坂の雛人形には勝手道具といわれる台所の雛形が含まれていた。中でも「旧矢代敏所蔵雛飾り　台所ミニチュア」（大阪くらしの今昔館蔵、図 47）は、大阪市内にあった自家の台所を模して作られたといわれる。幅が 2 mを超え、道具は本物と同じ材料で細部まで丁寧に作りこまれており参考になった。

図 46　台所

図 47　雛道具「旧矢代敏所蔵雛飾り　台所ミニチュア」

図 48　本の挿絵『女用智恵鑑宝織』

図 49　おもちゃ絵
『新板勝手道具つくし』

③ 近世の本の挿絵

内向きの空間である台所が肉筆画や錦絵に描かれることはほとんどない。しかし江戸時代に盛んに出版された女子用の教訓書や実用書には、家事の知恵や料理法が挿絵付で説かれている。それらの中から大坂で出版されたものを選び、参照した（図 48）。

④ おもちゃ絵

江戸時代から明治時代にかけて作られた浮世絵の中で、子どもの玩具として刷られたものを玩具（おもちゃ）絵と通称する。その一つ「勝手道具尽」（図 49）は台所道具のリストアップの参考になった[22]。

⑤ 江戸時代の家財道具の記録

天保 7 年(1836) に大坂の貸家の家財道具を書き上げた記録がある。「小林家文書」（大阪市立図書館蔵）は、貸家に最初から付属する道具と、借家人が調達した道具の両方を記録する[23]。また町家ではないが、大東市の平野屋新田会所の「深野南新田会所附諸色控」も江戸時代の家財道具の実態を示すものであった[24]。

⑥ 国立民族学博物館標本資料目録データベース

①～⑤の資料から台所用具をリストアップすることができたが、模型にするためには寸法のデータが必要であった。国立民族学博物館のデータベースは道具類の採取地、寸法、写真が公開されており、資料を選んで人形制作者に提供することができた[25]。

⑦ 岸谷勢蔵「生家」

堺の郷土画家である岸谷勢蔵(1899 ～ 1980) は堺市内の伝統的な商家に生まれ育った。生家は第二次世界大戦中に破却されるが、戦後、弟とともにかつての店の様子や生活を描き、画集「生家」を残した。食事の席順など、モノだけでは分からない情報を得ることができた。

これらの資料を元に以下の情景を再現した。

食事の席　台所の畳の部屋では、奉公人たちが箱膳で食事をしている。加島屋には享和 3 年（1803）に定められた「定書」があり、それによると奉公人は「食事臺所ヨリ為知

候節、格別之用向無之候ハヽ早速相仕舞可申菜類聊も好候事致間敷事」、すなわち台所から知らせが来たらすぐに食事を済ませること、おかずのより好みをしないこと、とある。ただし「病気ニ付服薬并格別之食事等好候ハヽ賄江相届ケ掛り之もの方相調可申事」とあり、病気の時には特別に好きなものを賄(まかな)いに言うことができた。月に三度、ありあわせの肴で酒を飲むことも許されていた。

岸谷勢蔵の画集「生家」には、奉公人の食事のさまが描かれている。近代の記録であるため、すでに箱膳ではなく大きな飯台を囲んでいる。しかし男と女は向かい合せに座り、土間に近い方から男は丁稚2人、中番頭、大番頭の順、女は下女中(少女)、下女中(大人)、上女中の順に座っている。女が竈側に座っているのは汁物の配膳のためであろう。模型では土間に近い框側に女中、奥側に丁稚と手代が座る形にした(図50)。

膳棚　食事部屋の西には大きな膳棚が並ぶ。膳棚は現存する棚の写真とともに、女子用の実用書から挿絵を収集した。京都で万治3年(1660)に刊行された『女諸礼集』挿絵の膳棚は戸が無く、安永9年(1780)刊の『女用千尋浜』で板戸がつく。しかし大坂で天明8年(1788)に刊行された『錦嚢百人一首』には細かい縦桟の戸があり、最下段には引出しがついている。縦桟の引戸は引手が不要でどこを持っても開けられ、忙しい台所では便利である。その後京都や江戸で刊行された本においても縦桟が主流になる。しかし引出しはなく、文政2年(1899)刊の『女寿蓬莱台』(図51)など、大坂の本に見られる特徴であった。模型は縦桟の戸で下段を引出しとしている。

土間　広い台所土間では女子衆たちが忙しく立ち働いている。その動作と配置は『百人一首　大和錦女教訓草』(図52)の挿絵を参考にした。畳に面した西側の流しでは女子衆がまな板の上で漬物を切っている(図53)[26]。窓に面した東側の流しでは釜を洗っている(図54)。土間では女子衆の少女が水桶を運んでいる。さらに加島屋の台所の広さを考慮して、東の7連の竈の前にも火吹き竹で火を熾している女子衆を設置した。

水まわり　台所が描かれた女子用実用書の挿絵の多くは流しの上に棚を吊り、笊(ざる)や擂鉢(すりばち)などを載せている。壁には色々な調理器具が下がり、包丁、まな板も手の届くところに

図50　食事

図51　膳棚『女寿蓬莱台』

図52　台所『百人一首　大和錦女教訓草』

図53　漬物を切る

置かれている。こうした道具類は台所らしい活気を生み出すため、流しの上には棚と吊り下がった調理器具を再現した（図 54）。ただし模型では東側を開けるので、女子衆の顔が隠れないように棚をやや高くしている。棚の吊り方や棚受けについても実用書から資料を集め、天保 4 年（1833）刊『都鄙安逸伝』などに基づいて再現した。享保 6 年（1721）刊『宝玉百人一首』や享保 14 年刊『女用智恵鑑錦織』（図 55）は道具の名をいちいち記し、家事に必要な道具の名を教えている。「うぐいす」は擂鉢の内側についたものをかき落とすへら、「こがらし」は擂粉木（すりこぎ）、「せきもり」は笊（ざる）、「くろ」は釜・鍋、「九こん」は酒のことである。

竈　竈は「加島屋本宅絵図」に位置が記されている。台所土間の東には焚口が 7 つある竈が並び、西側の上がり框に焚口が 3 つある竈が置かれている。竈の形は天保 6 年（1835）刊『街廼噂（ちまたのうわさ）』や『守貞謾稿』（図 56）に基づき、竈の下に薪を積む様子は『百人一首　大和錦女教訓草』などに基づき再現されている。竈の焚口には煤跡がつき、火消壺、十能（灰を運ぶ匙型の道具）、腰掛が置かれ、柱の上には「火之要慎」の札を貼るなど、生活感が出るように工夫している（図 57）。

大竈　大竈は焚口が 3 ～ 7 基並ぶ常用の竈から離れた場所に、1 基のみ独立して築かれた。釜穴の差し渡しが 50cm もあり、大型の羽釜で正月や行事など特別な時に飯を炊いた。大竈は普通の規模の町家では少なく、豪商や豪農、寺社の台所など多人数の食事を賄う台所に築かれる。模型は奈良・高畑町の町家や寺社などで公開されている竈を参照した。

大竈は普段使わない時は竈の上に竹で編んだ釜輪を乗せ、その上に羽釜を乗せる。これは釜が竈に張り付くのを防ぐためとも飾りのためともいわれている。羽釜の蓋の上には榊や神酒を供え荒神を祀った。『守貞謾稿』に京坂で釜上に供える荒神松は 2 ～ 5・6 尺の松で、小榊を花瓶にいれて供えるとしている。模型はこれを再現している。

水神　井戸のそばには水神が祀られた。模型では東南隅に井戸があり、東側を開放することから適当な壁がない。伏見の月桂冠・大倉家の台所では戸口の上に神棚があるとこ

図 54　水まわり

図 57　竈と大竈

図 55　台所道具『女用智恵鑑錦織』

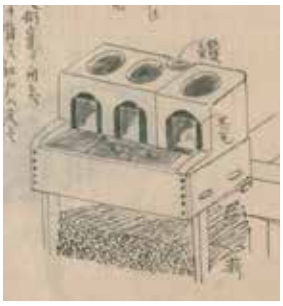

図 56　竈『守貞謾稿』

ろから[27]、勝手口の戸の上に神棚を設けた（図 58）。京都の町家の例にならい、小型の宮形に札を納め白い花瓶に榊を差している。

その他の道具　台所の南側の出口は時には外へ出るための裏口の役割もすると考え、戸障子の上には傘立てをつけた。井戸の横には木を組み合わせた芋洗いが置かれている。大人数の食事を作る大店ならではの道具である。その横の膳棚は引き戸があいて中の食器が見えている。井戸の周辺は雑多なものが置かれ、生活の息遣いが感じられる場所である。人形制作者は模型で見にくいところまで当初の配置案（図 59）を再現した。

（7）裏庭の風景

台所の南側には裏庭が広がる。裏庭の西側は風呂場と便所、南側は蔵と臼部屋、東側は納屋と便所に囲まれ、座敷からは見えない空間である。この空間では勝手向きの作業が行われ、納屋には薪や炭が置かれていたと思われる。軒先には干し柿が吊るされている。風呂の焚口は「加島屋本宅絵図」に描かれた形状から、外釜式の「子持風呂」と考えられ、Ｅ・Ｓ・モースの『日本人の住まい』の挿図や『守貞謾稿』の記述から再現している（p.15 参照）。台所の竈が薪を積んでいたのに対し、ここでは炭を用いるので炭箱、炭ばさみ、火消壺が置かれている。

棒手振の八百屋　棒手振（ぼてふ）りの八百屋が裏庭にまで入り女子衆と会話をしながら野菜を売っている。棒手振の八百屋は『守貞謾稿』（図 60）、『澱川両岸勝景図会』、「浪華下村店繁栄之図」などから再現した。籠の中には大根、蓮根、かぼちゃ、葱など秋の野菜が積まれている(図 61)。裏木戸は明け放され、八百屋がどこから現れたのかを示している(図 62)。加島屋の横の路地が使用人や出入りの棒手振りなどの通路になっていたことを暗示している。

図 58　神棚と傘立

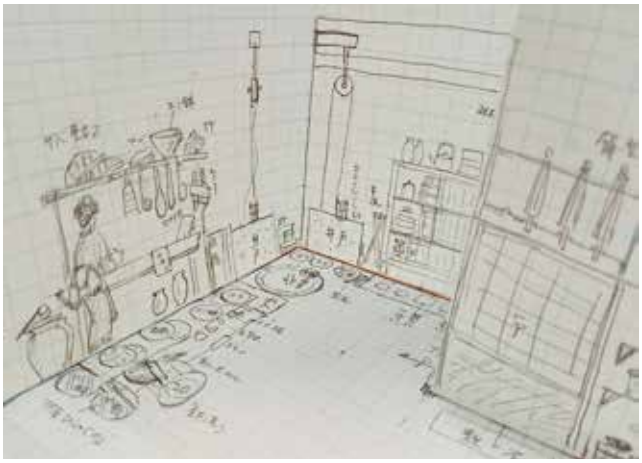

図 59　台所道具の配置案

図 60　棒手振りの八百屋『守貞謾稿』

図 61　八百屋と女子衆

図 62　裏木戸

図 63　洗濯『女四書芸文図会』

図 64　洗濯場と物干し

図 65　蔵を見る浅子

図 66　裏の路地

洗濯場と物干し　洗濯の様子を描いた絵は、実用書の挿絵だけでなく、「滑稽浪花名所」や「浪花名物自慢尽」などの浮世絵にも多い。かつて女性の家事のうち多くの時間と労力が洗濯に費やされていたことを思わせる。絵画資料では台所を出てすぐの場所に井戸があり、洗濯場となっている例が多い（図 63）。しかし加島屋の井戸は台所の南端の屋内にあり、中庭には井戸がない。台所の南に 1 間分の戸口があり大きく開口することから、洗濯や風呂の給水は台所の井戸が用いられたと考えられる。当初、勝手口のそばに洗濯場と物干しを設置しようとしたが、裏庭は棒手振りの八百屋と買物をする女子衆が置かれる。ここに物干しを置くと、モースの絵を再現した風呂場の焚口という見所が見えにくくなる。そこで、洗濯場を裏庭の南に広がる空間に移動した（図 64）。ここは「加島屋本宅絵図」では「臼部屋」と書かれている場所であるが、資料に乏しく構築物は再現しなかった。そこで洗濯用の洗い桶と砧石（きぬたいし）（洗濯に用いる平たい石の台）を設置し、物干しを立てた。さらに壁に箒と塵取りをたてかけ、掃除・洗濯など日々の家事が行われていることを表した。

（8）その他の点景

蔵の前の浅子　浅子が店の者に道具蔵を開けさせたところ、多くの棚が空になっているのを見て驚くという場面である（図 65）。店の経営が危機に瀕していることを知り、それまでの何不自由ない御寮人さんから女性実業家へと転身していくきっかけになる重要な場面である。この場面は早くから設定されていたが、模型を組み上げると屋根や庭木の影になり、見つけにくい位置になった。鑑賞者にあらかじめ場面があることを知らせておき、探してもらうなど、楽しませる工夫がさらに必要であろう。

浅子の姿は模型の中に 3 か所に登場する。店の前で駕籠を降りたところ、奥座敷での家族団欒、そしてこの蔵の前である。それぞれに幕末期の廣岡浅子と加島屋の変貌を予感させ、鑑賞者の関心を高める仕掛けとなっている。

裏の路地　人通りのない裏の路地では男の子と犬が仲良く走り回り、女の子がそれを追っている（図 66）。

模型の鑑賞者は、賑やかな土佐堀通り、店の立派な表構えを見て、店の中の細かい造りを鑑賞する。そして最後に店の裏側の路地に気付く。誰もいない路地を仲良く子どもと犬が駆けていく様は、模型の世界に余韻を漂わせている。

3．まとめ

以上、この模型では次のことに留意した。まず大坂あるいは上方の江戸後期の風俗や風習を、できる限り典拠に基づいて復元した。掛軸・茶道具などは昭和 3 年の売立目録に基づき、加島屋に確実に存在したものを再現している[28]。資料の無い襖絵については大阪くらしの今昔館所蔵の大坂画壇の作品を調整して嵌めた。1/30 という縮尺に関わらず米切手、表座敷と奥座敷の掛軸などは大きく再現した。これは商売やしつらいの様子を分かり易く伝えるためである。また洗濯場の位置も推

定位置をずらして配置した。これも鑑賞者の見やすさを考慮した工夫である。

今回の風俗考証の過程で、既存の絵画にもこれまで見過ごされていた風俗に関する情報があることが分かった。こうした情報の蓄積は、今後の展示や資料研究に生かすことができる。その意味でもこの加島屋本宅模型の制作は、有意義な試みであったといえる。

（岩間 香）

---

1 「幕末･明治期日本古写真コレクション」長崎大学附属図書館「幕末･明治期日本古写真データベース」などを参照した。

2 樋口知子「京都・大坂三井両替店等勤仕者談話要領―幕末維新期の三井両替店―」『三井文庫論叢』28 号　三井文庫編、1994

3 油井宏子『江戸奉公人の心得帖』新潮新書、2007

4 煙草入れは腰に提げる提げ煙草入れと着物の懐に入れる懐中煙草入れがあった。提げ煙草入れは腰まわりの装飾品として庶民に愛用され、個性的なものも作られた。たばこと塩の博物館サイトの解説による。

5 「二代目沢村国太郎当狂言着替すがた」に見る「極彩色娘扇」の平助女房お牧の着物など。

6 上荷船が川船形式で、長さ 30 尺 8 寸（9.33 m）幅 6 尺。20 石積で加子は 2 人であるのに対し、茶船は船首に水押し（船首の波切の木）がある海船形式で、長さ 26 尺 5 寸、幅 5 尺 6 寸。10 石積で加子は 1 人であった。

7 麻生正蔵「広岡刀自を憶ひて」（『家庭週報』504 号、1919）には「輿」と記されているが、江戸時代に町人の女性が輿を用いる例は他に見いだせず、ここでは駕籠とした。

8 江戸ではさらに簡素な四つ手駕籠があった。

9 櫻井芳昭『ものと人間の文化史　駕籠』法政大学出版局、2007

10 高槻泰郎編著『豪商の金融史』慶応義塾大学出版会、2022

11 徳川幕府の御用絵師の家系であった狩野派では障壁画の画題は部屋の格に合わせて「山水 - 人物 - 花鳥」を当てはめた。また絵の描法は「真 - 行 - 草」の順に格付けを行った。

12 向かって右(西) の 4 面 2 間分は元の図をそのまま使用し､左(東) の 3 面 1.5 間分は元の図が 1.25 間分しかないため、人物を加えて配置などを調整した。

13 廣岡家伝来の摸本は「鶺鴒図」「鶉図」のみであったが、同じ三幅対の別の摸本が遠州流家元家にあり公式サイトで公開されていた。「竹雀図」はこれを参照した。

14 「馬越恭平廣岡恵三宛書簡」神戸大学経済経営研究所蔵。吉田一正氏の御教示による。

15 『碧巌録』は宋代の禅書。雪竇重顕（980 ～ 1054）が、唐代の公案百則を集めたものに圜悟克勤（1063 ～ 1135）が評釈を加えた。

16 高橋義雄『近世道具移動史』廣文堂書店、1929

17 実際には利休以前にあったと考えられている。藤田美術館サイトを参照

18 茶道の所作や約束事については大阪くらしの今昔館の深田智恵子学芸員の助言を得た。

19 廣岡家伝来品のうち①「福寿草鶏画」に「梅窓庵」印があり、その箱書に「正誠筆」とある。ただし箱書は後世のもの。②一行書「竹棲五彩鸞」に大徳寺 427 世剛堂宗健（天保 6 年 1835 没 75 才）による「廣岡梅窓庵」への為書があり落款に前大徳とある。大徳寺住職には 1812 に就任。やめた時は不明だが、429 世は 1814 年に就任。「前大徳」とあるので、1813 年か 1814 年以降。③「冨士図」は梅窓庵の画に大徳寺 451 世　顕道宗昌（慶応 2 年 1866 没 86 才）が着賛。以上の三点を勘案すると梅窓庵は廣岡家当主で年代から第 6 代当主の正誠（1774 ～ 1833）であると考えられる。

20 樋口知子前掲書

21 浅子は「主人にも学問修養を勧め、自分とともに隣家の儒者某なにがしに就き漢学儒学を勉強せられたのである。」とある。麻生正蔵前掲書

22 「勝手道具尽」は大坂で出版されたことが確実なものが見いだせず､リストアップの参考にとどめた。

23 この記録に関しては次の資料に論考がある。谷直樹「江戸時代大坂における町家の台所空間」『家具道具室内史』14 号、2022、pp.149-175

24 大東市史編纂史料集『平野屋会所文書Ⅱ』所収。大東市教育委員会、2015

25 国立民族学博物館標本資料目録データベース

26 一琴楼胤信著　明治 14 年（1881）刊、東京書籍株式会社付設教科書図書館東書文庫蔵　を参照した。

27 月桂冠大倉記念館のサイトを参照した。

28 模型の制作に考証が間に合わなかったところも一部ある。御寮人や丁稚の髪型などは大坂の特徴を出すことができなかった。また見世の間で働く者の服装について、前垂れや羽織の有無など明らかにし得なかった。細部については今後の課題であろう。

付記：本稿中の図の典拠を下の表に記した。
　　国立国会図書館蔵品は国立国会図書館ウェブサイトから転載した。

図番号	キャプション	出　典	所蔵者
1	人形の大きさ	模型	大同生命保険株式会社蔵
2	男性の髪型『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻9	国立国会図書館蔵
3	竪結び『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻15	国立国会図書館蔵
4	帯を竪結びにする武士	模型	大同生命保険株式会社蔵
5	両輪髷（左）と先笄髷（右）『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻11	国立国会図書館蔵
6	着物の裾をはしょる『浪花百景』	『浪花百景』天下茶や　ぜさい	大阪くらしの今昔館蔵
7	角出しの図解		個人蔵
8	角出しの浅子	模型	大同生命保険株式会社蔵
9	女中『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻11	国立国会図書館蔵
10	江戸前期の植木屋『人倫訓蒙図彙』	『人倫訓蒙図彙』　元禄3年（1690）刊	国立国会図書館蔵
11	植木屋	模型	大同生命保険株式会社蔵
12	下男『二千年袖鑒』	『二千年袖鑒』　大坂かじ久　弘化4年（1847）刊	大阪くらしの今昔館蔵
13	下男「住吉図」屏風	「住吉図」屏風	個人蔵
14	下男	模型	大同生命保険株式会社蔵
15	幼児の髪型『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻9	国立国会図書館蔵
16	女児の髪型『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻12	国立国会図書館蔵
17	幼い姉弟	模型	大同生命保険株式会社蔵
18	加島屋『二千年袖鑒』	『二千年袖鑒』　大坂かじ久　弘化4年（1847）刊	大阪くらしの今昔館蔵
19	加島屋の前を再現	模型	大同生命保険株式会社蔵
20	べか車「浪華下村店繁栄之図」	「浪華下村店繁栄之図」　佐藤保大筆	大阪くらしの今昔館蔵
21	べか車（下）と両替屋用べか車（上）『守貞謾稿後集』	『守貞謾稿後集』巻3	国立国会図書館蔵
22	べか車	模型	大同生命保険株式会社蔵
23	加島屋付近の岸『乗陸必携　大川便覧』	『乗陸必携　大川便覧』天保14年（1843）刊	摂南大学図書館蔵
24	上荷船「浪速勝景帖」	「浪速勝景帖」　五井金水筆	大阪くらしの今昔館蔵
25	上荷船	模型	大同生命保険株式会社蔵
26	法仙寺駕籠『守貞謾稿後集』	『守貞謾稿後集』巻3	国立国会図書館蔵
27	駕籠から降りた浅子	模型	大同生命保険株式会社蔵
28	米方両替『米穀売買出世車図式』	『米穀売買出世車図式』　延享5年（1748）刊	神戸大学経済経営研究所蔵
29	見世の間	模型	大同生命保険株式会社蔵
30	米仲買人『滑稽浪花名所』	『滑稽浪花名所』堂島米市	大阪くらしの今昔館蔵
31	米切手		神戸大学経済経営研究所蔵
32	包銀と船箪笥	模型	大同生命保険株式会社蔵
33	包銀用印の印影		大同生命保険株式会社蔵
34	廣岡家伝来の船箪笥	「廣岡久右衛門家文書」7-0	神戸大学経済経営研究所蔵
35	表座敷		大同生命保険株式会社蔵
36	「蘭亭曲水図」襖		大阪くらしの今昔館蔵
37	「林和靖図」襖		大阪くらしの今昔館蔵
38	売立目録　左から「竹雀」「鶴鴒」「鶉」	『もくろく』昭和3年（1928）	個人蔵
39	「鶴鴒図」模写		個人蔵
40	「鶉図」模写		個人蔵
41	茶室	模型	大同生命保険株式会社蔵
42	売立目録 「一ノ字」	『もくろく』昭和3年（1928）	個人蔵
43	売立目録 「紅葉呉器茶碗」	『もくろく』昭和3年（1928）	個人蔵
44	奥座敷	模型	大同生命保険株式会社蔵
45	「大黒図」	「大黒図」　廣岡正誠筆	個人蔵
46	台所	模型	大同生命保険株式会社蔵
47	雛道具	「旧矢代敏所蔵雛飾り　台所ミニチュア」	大阪くらしの今昔館蔵
48	本の挿絵『女用智恵鑑宝織』	『女用智恵鑑宝織』　明和6年（1769）刊	横浜国立大学付属図書館
49	おもちゃ絵『新板勝手道具つくし』	『新板勝手道具つくし』　歌川重宣画	大阪くらしの今昔館蔵
50	食事	模型	大同生命保険株式会社蔵
51	膳棚『女寿蓬莱台』	『女寿蓬莱台』　文政２年（1819）刊	東京書籍株式会社付設教科書図書館東書文庫蔵
52	台所『百人一首　大和錦女教訓草』	『百人一首　大和錦女教訓草』	東京書籍株式会社付設教科書図書館東書文庫蔵
53	漬物を切る	模型	大同生命保険株式会社蔵
54	水まわり	模型	大同生命保険株式会社蔵
55	台所道具『女用智恵鑑錦織』	『女用智恵鑑錦織』享保14年（1729）刊	お茶の水女子大学附属図書館蔵
56	竈『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻3	国立国会図書館蔵
57	竈と大竈	模型	大同生命保険株式会社蔵
58	神棚と傘立	模型	大同生命保険株式会社蔵
59	台所道具の配置案		個人蔵
60	棒手振りの八百屋『守貞謾稿』	『守貞謾稿』巻6	国立国会図書館蔵
61	八百屋と女子衆	模型	大同生命保険株式会社蔵
62	裏木戸	模型	大同生命保険株式会社蔵
63	洗濯『女四書芸文図会』	『女四書芸文図会』天保6年（1835）序	京都大学附属図書館蔵
64	洗濯場と物干し	模型	大同生命保険株式会社蔵
65	蔵を見る浅子	模型	大同生命保険株式会社蔵
66	裏の路地	模型	大同生命保険株式会社蔵

見世（店）

表座敷

茶室

奥座敷

台所土間（表側）

台所土間（奥側）